



園児・小学生・高校生・地域が 一体となって取り組む 「防災ガーデン」を通じた避難所での 「食」に焦点をあてた災害避難者支援活動

徳島県阿南市 徳島県立阿南光高等学校
防災士の会顧問 湯浅 正浩



1 はじめに

徳島県立阿南光高等学校は、災害時の広域避難所としての機能を有する教育施設として、南海トラフ地震をはじめとする災害時には、地域住民、地元の小学校の児童や保育園等の子どもたちが避難する環境にあります。

そうした中、東日本大震災や石川県能登半島地震への復興支援活動での避難所の「食」の聴き取り調査から、野菜不足による健康への課題がみえてきました。

その課題解決に向けて校種間（幼稚園・小学校・高校）の垣根を越えた避難所での「食」に焦点をあてた支援活動として、地元の子どもたち、さらには地域住民が主体となって新鮮野菜を提供する「防災ガーデン」を校内に設置し、その運営を通じて「災害を迎え撃つ防災人材の育成」に取り組んでいます。

2 取り組みの背景

災害時、避難所生活では、どのような栄養分が不足してしまうのでしょうか。私たちは、この疑問から調査を開始し、災害時の避難所の食事といえば、パンやおにぎりといった炭水化物主体の食事が中心となり、ビタミンやミネラルを多く含む野菜などの副食が不足することで栄養バランスが偏り免疫機能や体力の低下が認められ健康への不安とともに避難者からは「野菜が食べたい」等の意見が多く寄せられたことを知りました。私たちは、この災害時の食のQOLを高める取り組みから防災まちづくりを展開しています。

3 取り組みの内容

私たちが目指す防災まちづくりは、災害時でも「衣・食・住が足りることが幸せである」ことです。その中でも避難所においては、「食」に焦点をあてた支援が重要であると考えました。この取り組みは、だれ



高校生が保育園児を引率しての率先避難行動



小学生による防災ガーデンでの収穫



避難所で園児が取り組む防災ガーデン



防災ガーデンの効果を東京で発表

一人、取りの残さない「災害を迎え撃つ備えの一步」として、高校生、園児、小学生さらには地域住民と一体となって「毎日が防災の日」として「防災ガーデン」を展開しています。

【食を通じただれ一人、取りの残さない支援】

「食」は、災害時の健康とストレスの軽減につながり災害時におけるコミュニケーションの一端を担うことから「食」を介した人と人のつながりは、だれ一人、取り残さない支援へとつながると考えています。

【四季折々の野菜栽培から食育を通じた家庭防災】

災害時での「食」のQOLが健康を支えていることを踏まえ、子どもたちが自ら栽培した四季折々の野菜を収穫し家庭へ持ち帰ることで、そこで培われた防災への意識が、家庭や地域を巻き込む防災力の向上につながると考えています。

【災害を迎え撃つ備えの一步として人と人をつなぐ防災ガーデン】

これまでの災害支援活動の経験から、地域のつながりが災害への備えの基本だと考えています。地域との交流は災害時には共助でお互いを助けます。地域と創る「防災ガーデン」は、人と人をつなぐ憩いの場としての機能も兼ねており、災害時の行動の起点となるものであると考えています。

4 取り組みの効果

災害時の被災者の「食」に着目し、その生活の質の向上ならびにコミュニケーションを図る発想は、避難所運営の先導的な取り組みとして革新的で、さらに運営方法も防災士の資格を有する生徒やそのOBOGに加え、地域の小学生や保育園児を含めた地域住民や団体が広く参加することで、そこで生まれる連携と交流は、防災意識の向上のみならず、次代を担う防災人材の育成に効果をもたらしています。

また、肥料には河川や道路・公園等の維持管理で発生する「刈草」と放置竹林の「竹」を原料に開発した資源循環型肥料を活用することで、防災と環境という異分野の連携という面でも画期的な取り組みとして評価されています。

5 おわりに

今後は、災害時に周辺農家の協力による野菜提供の仕組みづくりを計画しており、近隣の小学校や保育園等への防災ガーデンの設置・拡張、ならびに栽培に習熟した職員・生徒の存在、さらには卒業生の支援協力といった学校が有する資源の強みを最大限に活かし、避難所を起点とした地域一丸となった「災害を迎え撃つ防災まちづくり」に取り組んでいきます。